



## 戦争詩としての"To the Indians who Died in Africa"

著者	田口 哲也
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	52-53
ページ	56-73
発行年	1991-02
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001668">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001668</a>

# 戦争詩としての “To the Indians who Died in Africa”

田口哲也

## I

この論考で取り扱う作品は“To the Indians who Died in Africa”という、T. S. エリオットにしては少し変わったタイトルを持つ作品である。テーマはこの作品が持つ戦争詩としての性格であるが、論及はあくまでエリオットという一人の詩人のこの一つの作品に限定される。エリオットは第二次世界大戦に直接言及した機会詩を他にもいくつか残している。<sup>1</sup> また大戦中に書かれた *Four Quartets* の戦争詩としての性格もかなり前から指摘されている。<sup>2</sup> 結局戦場に赴くことはなかったものの、戦争に志願さえしたことのあるエリオットが戦争をどう考えていたか、また戦争が彼の文学にどのような影響を与えたかは興味深いテーマであるが、ここではこの問題を包括的には扱わない。また戦争詩一般についての考察も、対象を極めて徹視的に限定する関係上はなほだ不十分であることを断っておかなければならない。イギリスの伝統的な戦争詩のコンベンションを意識して書かれたこの作品にどれだけの意味があるのかは疑問であるが、第一次世界大戦にその詩的営為を振り向けたのはエリオットなどのモダニズム系の詩人ではなく、かれらが否定したジョージアン系の詩人であったことを思えば、この作品が書かれた時期に何らかの変化が詩人の内部で生じていたことは確かである。二つの大戦に対する詩人の取ったスタンスの違いをたどれば、エリオットの芸術の変化の過程が従来の余りにも詩人自身の発言に追従しすぎた見方から離れて、より

客観的に展望できるのではないかと思えるが、本論ではその突破口として、まずこのエリオットにしてはやや不用意に書かれた戦争詩を解明することに専心する。

議論の順番としては最初にこの作品に対する簡単な解釈を行い、次にすでに何人かの先行する批評家たちによってなされた議論を再検討し、さらにこの作品の背景について考えてみたい。背景としては第二次世界大戦における北アフリカ戦線、インドの状況、そしてこの作品が発表された1943年のエリオットの動き、この三つが考えられる。作品への求心的なアプローチと遠心的なアプローチを統合するのは戦争というテーマであるが、このテーマを忘れた時にこのような批評上のバランスが崩れてしまうのをしはしば、特にインド人の研究者の中に見ることが多かった。煩わしい背景への言及をあえて付け加えたのはこの作品の中に強く認められるインド思想に必要以上にしぼられないためのディフェンスでもある。

## II

この作品は余り論じられることのなかった作品である。その理由はいろいろ考えられるが、最大の理由はこの詩の後半に現れるインド思想の影響を受けた詩行の歌う内容がより普遍化されて、大作 *The Dry Salvages* III に表されているからである。従ってこの両者の関係は *Dans le Restaurant* と *The Waste Land* の第四部、“Death by Water” と同じように考えられてしまい、片方の詩がもう一方の詩の一種のヴァリエントのようにみなされてしまうからである。<sup>3</sup> このような誤解を避けるためにも、また特殊な場合を除けば研究書等で紹介される頻度も低いので、ここでは作品全体を引用し、私なりの解釈をまず施しておきたい。

A man's destination is his own village,  
His own fire, and his wife's cooking;  
To sit in front of his own door at sunset

And see his grandson, and his neighbour's grandson  
 Playing in the dust together.

Scarred but secure, he has many memories  
 Which return at the hour of conversation,  
 (The warm or the cool hour, according to the climate)  
 Of foreign men, who fought in foreign places,  
 Foreign to each other.

A man's destination is not his destiny,  
 Every country is home to one man  
 And exile to another. Where a man dies bravely  
 At one with his destiny, that soil is his.  
 Let his village remember.

This was not your land, or ours: but a village in the Midlands,  
 And one in the Five Rivers, may have the same graveyard.  
 Let those who go home tell the same story of you:  
 Of action with a common purpose, action  
 None the less fruitful if neither you nor we  
 Know, until the judgement after death,  
 What is the fruit of action.<sup>4</sup>

第一連では人間的な幸福がこれ以上はないという形で描かれている。自分の村の、自分の家の炉辺、それに愛妻の手料理があり、現役を退いた男が、素朴でささやかな老後の安楽を味わっている。かつてのゲロンチョンの生と比べてみればここでの幸福感が浮き立っていることがよく分かる。男の視線は土埃の中で遊ぶ若い生命に向けられている。*Landscapes* 中の “New Hampshire” や *Burnt Norton I* などに見られる幸福な幼児期の回想につながってゆく詩行である。<sup>5</sup> しかし老人はこのような至上の人間的幸福の中にありながら確実に死に近付いている。死に向き合いつつ自らの生の意味を問

おうとする。

幼い子供の無垢な喜びは一瞬にして消え、第二連では一転して見知らぬ土地で戦った、見知らぬ男たちの幾多の記憶が甦ってくる。この作品はもともと Cornelia Sorabji 女史の依頼で *Queen Mary's Book for India* という書物に収めるべく書かれたものであり、後に述べるように第二次大戦における北アフリカ戦線を強く意識している。自分の生命を賭けて戦う以上、戦場での記憶は鮮烈であり、戦いの意味を、またその戦いのさなかにあった自己の生の意味を問う男の姿はいつの時代にも、どこどの国にでも見かけられるものではある。“Scarred but secure” という表現はこのような記憶とその記憶が自己に強制する問いかけが肉体に刻み込まれていることを伝えている。ただしここではそのような戦争の傷痕は悪夢となって訪れ、帰還兵の生を押し潰すような実存的な現れ方をしていない。目撃したはずの死体は描かれていない。あるのは戦場で死んだ者の記憶を携えて戦場から戻った者のいま現在の時間のみである。ここから後半の二つの連で展開される思弁が生まれるのであるが、ジノサイドを生み出した近代戦の犠牲者への哀悼のために書かれなければならなかったはずの本来のテーマと、詩人が設定した語り の視座にずれがあることを覚えておく必要がある。第一次世界大戦で肉体を破壊され、意識だけが辛うじて残されたものの、生き続けて行く上での意味を奪い尽くされてしまった悲惨な英国陸軍の一兵士を描いた *Johnny Got His Gun* のような視点が欠如していると批判しているのではない。肉体も精神も破壊し尽くす近代戦の持つニヒリスティックな破壊の意志、換言するなら巨大なカニバリズムの一人歩きを前にしてエリオットが用意した視座がはたしてどの程度まで有効であり得るかということである。

第三連の一行目は、第一連の一行目とほとんど同じ言い回しで始まる。違うのは、“his own village” が “not his destiny” に変わっている点だけであり、つまり、“A man's destination” = “his own village” ≠ “his destiny” という関係が明かになる。人間的幸福の限界が示され、一個人の運命はあく

まで相対的なものにすぎず、絶対的な運命は死後の世界を含む神秘的な永遠の巨大な広がりの中に求められるべきものであることが暗示される。現世での終着点はこのより高次の運命への出発点に他ならない。国境は取り払われ、自分の運命に逆らわずに死を静かに受け入れた者だけが被造物に溶け込み、創造者の意志と一致することになる。エリオットは E. M. フォスターのように、このようなインドの諦念が生きた伝統として実際に多くのインド人たちによって受け入れられ、信仰されていたことを経験してはいない。彼がこのような思想を発見し、熱中したのは遠くハーバードでの学生時代のことであり、インド思想とエリオットを結び付けるものは知的実践しかなかったはずである。にもかかわらず、彼のこのような人工的な信仰を後に挙げるようなインドのエリオット研究者が手放しで賞賛するのは、単にパトリオティズムだけがなす業ではない。経験を介在させることによって、例えばフォスターが西欧との異質性を見事に抽出させたのに対して、エリオットは極端な言い方をするなら、いわばインド人とはまるで別個に彼自身の信仰を学問から抜き取り、彼個人の特殊な信仰を作り上げてしまったのだ。ことがインド思想という一見西欧の知とは合い反するものであり、しかもダンテやブラッドリー以上に近付きにくいものであるだけに、特別視しがちであるが、エリオットの換骨奪胎のパターンは変わらない。

第四連では *The Dry Salvages* III でお馴染みの上記のインド思想を援用した思念が開陳される。すでに第二連であった、“(The warm or the cool hour, according to the climate)” という遍在化された経験は第三連において “Every country is home to one man / And exile to another.” と一旦普遍化されたものとなり、さらにこの第四連では “Midlands” と “Five Rivers” という固有名詞を与えられて、新たに現実性を付与される。Punjab の英訳である “Five Rivers” ではともかく、Midlands ではこのような死を迎えた者はほとんど考えられないのであるが、そこにアフリカという中間項を用意することによって、エリオットはやすやすと読者を彼の信仰の世界に引き入

れてしまうのである。一行目の “This is not your land, or ours” というフレーズはいつもながら巧みである。異国での経験という点では共通点を持つイギリスとインドの融合をこのように試みるエリオットの作品を、はたして新生インドの旗揚げに立ちあつたマウントバットンを読むことがあつたらうか。共通の目的を持った行為は、たとえその行為から生まれる果実の意味を知ることができないにしても、実りあるものとしてとらえられ、この短い詩は終わる。ということは、第三連で歌われていた、自分の運命と一つになつて見事に死ぬことがこの前提として達成されていたことになる。現実の問題はともかくとしてエリオットの心の中では、かくあらねばならなかつたとしたら、そのような願望は一体どこから来たのであろうか。

### III

この詩に対するコメントは決して多くはないが、そのうちの幾つかを並べてみることにする。最初に Robert Crawford の意見を紹介しよう。「砂漠はエリオットにとって単に死の場所であるのではなく、キリスト教的勝利の場でもあつた」と述べたあと彼は次のように続けている。

He gave high praise to the biography of a French priest killed in North Africa. Charles de Foucauld travelled disguised, the first explorer 'in unexplored and unsubdued territory'. He gave aid to the tribesmen and aimed primarily not to convert by teaching, 'but to *live* the Christian life, alone among the natives'. Finally, Foucauld was killed by a marauding band which was unaware of his name and reputation. 'There is no higher glory of a Christian empire than that which was here brought into being by a death in a desert'. This piece relates to the 'explorers' of 'East Coker', and to the poem on 'the Indians who Died in Africa'. It is the revision of the theme of cannibal and missionaries in *Sweeney Agonistes* which makes possible the fate of Celta in *The Cocktail*

*Party*. It also relates to Eliot's sense of the poet's mission in 'Little Gidding' when the streets of London become simply a tribal homeland.<sup>6</sup>

Crawford が引いているエリオットの発言は、*Listener* 1941年4月10日号に掲載された 'Towards a Christian Britain' と題された文章からである。<sup>7</sup> エリオットの殉教への強い関心は若年のころからのものであるが、それはしばしばほとんど官能的にさえなることがある。Crawford はここでこの殉教への憧憬の下に系譜付けることができる一連の作品群のひとつとして問題の詩を考えている。少し強引ではあるが、この詩の隠された主題、即ちエリオット独自の信仰のありかたに私たちの注意を向けるという点においては、この詩を *The Dry Salvages III* の付録として解説するような批評よりは有効であろう。

この作品の中で援用されているインド思想についてかなり早い時期に触れたものとして K. S. Narayana Rao の二つの論文がある。<sup>8</sup> インド思想は本稿のテーマに直接関係しないので、ここでは Robert H. Canary の手短な紹介と批判を利用させてもらうことにする。キリスト教と『バガヴァッド・ギーター』 (*Bhagavad Gita*) の間にある恩寵を通しての救済という教えや、精神の遍歴を旅や航海のイメージで表すというような類似性を指摘しても、『ギーター』のエリオットへの根本的な影響はなんら証明されないと Canary は断言する。<sup>9</sup> Rao は最初の論文でこの詩の最終連に特に言及し、いかに『ギーター』の哲学とシチュエーションが反映されているかを論じ、次の論文では、*Collected Poems 1909-1962* にこの作品を取めるにあたってエリオットが施した修正について触れ、その修正は詩の持つ哲学的な内容を弱くして、その分だけインド人の読者の興味を削いだと主張している。Canary は修正についてのコメントは正しいものにせよ、エリオットのこの作品は Rao が被せたがっている哲学を持つ程の重みはないと言い、返す刀でエリオットはこの種の機会詩には余り才能がないとさえ言っている。<sup>10</sup>



このような Canary の見解とまったく反対の立場に立つのは Amar Nath Dwivedi であり、彼は Rao の論点をさらに推し進めて、この詩のナレーターがまるでインド人ではないかと思わせるまでに読みを進める。彼によるとこの詩は間違いなく『ギター』II. 37. から直接触発されて書かれた作品ということになる。<sup>11</sup> Canary の Rao に対する反発は余りにもインド思想を強調することによって生じる過大評価を懸念してのものであろう。事実 Rao にせよ Dwivedi にせよ、すでに述べたように、エリオットにとってのインド思想が必ずしも絶対的なものではなく、彼特有の信仰を形成するうえでの一要素に過ぎないことを見逃している。その意味では Crawford のような見解はバランスを取り戻す上で必要である。が、Canary も Crawford も Rao や Dwivedi たちが強くエリオットの詩に触発された事実を見逃していると見えよう。エリオットのインド思想への一時期の傾斜は真性なものであったことは否定できない。<sup>12</sup>

ただそれはそれとして、Rao が気付いた疑念はもう少し深く探ってみる必要がある。Rao は魂の完成は孤独な求道であるとか、救済を求めようとするものは孤独なのであって、究極的には、すべての友人も身よりも互いに疎遠になるとかいった考えはヒンズー教ではよく知られた信仰であると述べ、次のように言葉を続ける。

However, it is doubtful that Eliot was aware of these beliefs at the time he composed this poem. His use of words, “foreign men, who fought in foreign places, / Foreign to each other,” may have been prompted by the strong nationalistic feelings in India at that time, the *swadeshi* (literally, *of one's own land*, and hence the opposition to the foreign rule) movement (also known as the Quit-India movement) and the then current Indo-British relationship.<sup>13</sup>

ヒンズー教徒にとってはごく自然に響くこの “foreign” という語の繰り返しはもたらす効果も、イギリス人にとってはより政治的な響きに聞こえるので

はないかと言うのである。テキストに反応するインド人の感性とイギリス人の感性の食い違いを Rao は言っているのだが、テキスト自体の中にこのような分裂があるとも考えられる。Crawford が引用した、キリスト教を国家の強固な精神的骨組みに再編成しようと志したエッセイが発表された1941年から、問題の作品が書かれた1943年にかけての時代状況を、北アフリカ戦線、インド、そしてイギリスの中にいた詩人の三つにわけて概観してみることにしよう。

#### IV

この詩の背景をなす北アフリカ戦線はドイツの名将ロンメルと英国の名将モントゴメリの対決として名高いが、この戦線は連合国側がドイツに対して敷こうとしていた第二戦線に対する効果的な代替物として、またそれを準備するものとして戦略的に重要な意味を持っていた。連合国側の戦略としては次の三点が議論されたという。1) 地中海制圧によって船舶を確保する。2) もしロシアが敗れ、ヒトラーがヨーロッパを支配することになっても、北アフリカ征服が若干の補償を英米両国に与えるであろう。3) ドイツはイタリアの救援に向かわなくてはならない。即ち、ドイツはロシア戦線と北フランスから陸軍および空軍兵力をまわさなくてはならない。<sup>14</sup> このような旧態依然とした帝国主義的打算のもとに戦場と化した北アフリカでは、多くの戦記が記すことになるロンメル將軍と連合国側の激しい戦闘が開始されることになる。1942年8月、エル・アラメイン (El Alamein) での激戦の後、同年11月にイギリス軍が決定的な勝利を収めるまでに、多数のインド人を含む戦死者が出たことは言うまでもない。

インドがイギリスから完全な自治を獲得するのは1947年8月である。第二次大戦では、第一次大戦の時と同じく、イギリスが宣戦布告をすればインドや各植民地は自動的に戦争に巻き込まれた。第一次大戦中にインドに積極的な協力を求めたイギリス政府は、戦後に自治を与えるという約束のもとにセ

ポイ（インド原住民兵）120万人を外地に動員し、3億ポンド以上の金をインドから引き出している。<sup>15</sup> 第二次大戦でもイギリスは同じ手を使い、イギリスに敵対するガンディー以下の会議派の指導者を投獄してしまう。第二次大戦におけるイギリス政府の強引なインドへの戦争協力の強制がインドの民族主義に火をつけ、その植民地支配を崩壊させたとも言えるのである。<sup>16</sup>

『ギター』から非暴力の抵抗を学んだと言われるガンディーが獄中で、しかも73歳という高齢にもかかわらず3週間にわたる断食をおこなってイギリスへの抗議を示すという事件が1943年2月に起きる。<sup>17</sup> それから約4ヶ月後に、エリオットの詩を載せた *Queen Mary's Book for India* が出版されている。この間のエリオットの動きを追ってみると次のようなことになる。<sup>18</sup>

2月22日 Harold Nicolson の日記によると、エリオットは食事での会話で、戦後のロシアの脅威を議論。エリオットは小国にとって最良の防護は 'a great international federation' であると考えていたようである。

3月18日 Anglo-Swedish Society の昼食会でスピーチを行う。タイトルは 'Civilization: The Nature of Cultural Relations' であった。エリオットは戦後の文化交流を強く望んでいた。

4月14日 Osbert と Edith Sitwell が組織した自由フランスを援助するための詩の朗読会に John Masefield や Edmund Blunden たちと共に参加する。インターバルの間に詩人たちはエリザベス王妃と対面。

5月11日 *Four Quartets* がはじめてアメリカで一緒にまとめられて出版される。（イギリスでの出版は1944年10月）

（この夏 *Little Gidding* を巡ってイギリスの文壇では賛否両論が渦巻く）

6月4日 *Tribune* への記事の中で、ジョージ・オーウェルがエリオットは右翼であるという非難からエリオットを弁護する。オーウェルはどのような政治的レベルによっても作家を判断することはできないと言う。

そして6月22日に *Queen Mary's Book for India* が出版される。

## V

狂ったように戦車を走らせ、砂漠の中で激しく戦ったヨーロッパの列強たちに混じって倒れて行くインド人もいれば、その中にはやがてノルマンディーで戦死する Keith Douglas のような若い詩人も混じっていた。エリオットは戦場を経験していない。だから彼の戦争詩は厳密には戦争詩ではないと主張できないことはない。少なくとも、Wilfred Owen の残したような戦争詩とは全く異質なものである。しかし望む望まないにかかわらず、詩人はエリオット流に言うなら、戦争という状況にかかわらざるを得なかった。<sup>19</sup> 本稿で論じているような作品を依頼されるようになったことから明らかなように、第一次大戦の時とは比べ物にならないほどエリオットの社会的な立場は変わっている。できることならエリオットは戦争に対して発言を控えたかったに違いない。例えばそれは、もし直接、間接の戦争の影というテーマで *Burnt Norton* と残りの三つの四重奏を比較してみるなら、かなりはっきりした形で出てくるトーンの違いからもうかがうことができよう。エリオットの政治的な立場を一言でもって断罪するのは容易であるが、その本質を彼の生きた時代状況の中で解き明かすのは意外に困難な仕事である。それは彼の社会批評についても同じであり、また実際には文芸批評においてはなお一層難解ですらある。なぜならエリオット自身が政治、宗教、文学などのそれぞれの独自性をしばしば強く主張し、いわばこれらを独立した精神領域と考え、それぞれの相互浸透を強固に否定し、禁止したからである。が、このような禁止を真っ先に破っているのはエリオット自身なのであって、具体的な仕事となって現れるとその相互浸透を抜きにしては決して理解できないような代物となる。

論の流れを大きく乱すような、改めて繰り返す必要もないことを上でくどくどと述べたのは、“To the Indians who Died in Africa” のような、とりたてて論じる必要もないような小さな作品を読み、そして作品の背景を追

うちに、このようなエリオットの特異な資質を強く意識させられたからである。Rupert Brooke の有名な愛国詩をまるで意識したかのような連があるかと思うと、結論としては『ゴーター』から学び取った思想で終わってしまったりしている、元々タイトルからして奇妙なこの作品は様ざまに拡散してしまいそうなセンチメントや思想の断片をひとつの極めて現実的な、具体的なテーマで統合するというエリオットの主要作品に見られる特質をやはり備えていて、その現実的な、具体的なテーマとは戦争に他ならない。<sup>20</sup>

私的な早まった結論を言うなら、この戦争詩にみられる詩人の戦争という状況への態度は判断停止である。無責任なようであるが、あらゆる予測は裏切られるものであるなら、一切の予測を捨ててただ生き続ける他はない。この作品は戦争という人間の愚かさとかニバリズムを体現した状況を前にした、特にエリオットが絶対的な価値を置いた西欧文明の自己崩壊を前にしたニヒリズムの別種の表明でもあるし、なおも継続中であつた戦争のさなかにあつて書かれたことを思えば、そしてイギリスのインド統治が理念的にも実質的にもはやその存在理由を失いつつある時に書かれたことを思えば、世界史の流れに身を任せて戦いを鼓舞するプロパガンダでもあり、またその過程で倒れた者を慰める祈りでもある。このように全く対極的な戦争に対する態度がひとつの詩のなかで同居することの不思議さを私たちはエリオットという奇妙な詩人の資質に帰すべきなのか、あるいはイギリスの伝統的な精神のありかたに帰すべきなのか、あるいは特に現代史の問題としてとらえるべきかは本論の任を越える問いである。恐らくそのいずれでもあろうという推測はできるが、この小さな作品に対する稚拙な論考が不十分なりにもこの作品の戦争詩としての読まれ方を示し得ていれば、この難問に取りかかる第一歩を踏み出したことになる。

## 注

本稿は1988年10月22日に徳島文理大学文学部に於て開催された、日本英文学会中国四国支部第41回大会での口頭発表をもとに、大幅に加筆、修正したものである。

- 1 有名なダンケルクからの撤退をテーマにした“Defence of the Islands”とメタ・ポエトリーとしての性格を持つ“A Note on War Poetry”の二つの機会詩も本稿で論じた作品と同じように、さらに論じられる必要のある作品である。なお、これらの詩はすべて *Collected Poems 1909-1962* (London: Faber and Faber, 1963) に収められている。エリオットからの引用は特に断りのない限りすべてこの版による。
- 2 例えば Donald Davie の次の三つの polemical なエッセイが興味深い。“T. S. Eliot: The End of an Era,” Hugh Kenner ed., *T. S. Eliot: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1962), “Eliot in One Poet's Life,” A. D. Moody ed., *'The Waste Land' in Different Voices* (London: Edward Arnold, 1974), “Anglican Eliot,” A. Walton Litz ed., *Eliot in His Time: Essays on the Occasion of the Fiftieth Anniversary of The Waste Land* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1972)。ただ Davie の論点は *Four Quartets* の戦争詩としての性格にあるのではなく、この作品そのものの否定にある。A. D. Moody は ‘The Three Voices of Poetry’ の草稿には ‘The last three of my quartets are primarily patriotic poems.’ という一文があったことを紹介している。*Thomas Stearns Eliot Poet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), p. 203。Moody の *Four Quartets* の解釈の真の意味での新しさはこの作品の持つ戦争詩としての性格を的確にとらえた点に由来するのは言うまでもない。
- 3 さすがに Grover Smith はこの作品を見逃さずにコメントを加えている。しかし言及は *Four Quartets* の解釈の中でなされていて、無論独立させて考えられているのではない。*T. S. Eliot's Poetry and Plays: A Study in Sources and Meanings* (Chicago: The University of Chicago Press, 1950; second edition, 1974), p. 281.
- 4 *Collected Poems 1909-1962*, p. 231.
- 5 “Children's voices in the orchard” (“New Hampshire”), “the leaves were full of children” (*Burnt Norton I*)。なお Smith は Kipling の “The Story of Muhammad Din” のエコーがこの作品と “Difficulties of a Statesman” に認められることを指摘している。Smith, p. 281。確かに “Difficulties of a Statesman” の終わりには “To the Indians who Died in Africa” の第一連とそっくりのイメー

- ジが出てくる。"Rising and falling, crowned with dust', the small creatures, / The small creatures chirp thinly through the dust, through the night."
- 6 Robert Crawford, *The Savage and the City in the Works of T.S. Eliot* (Oxford: Clarendon Press, 1987), p.223.
- 7 後に David Edwards ed. *The Idea of a Christian Society and Other Writings* (London: Faber and Faber, 1982), pp.117-123 に所収。
- 8 "T.S. Eliot and the *Bhagavad-Gita*," *American Quarterly*, XV (1963), 572-78. "Addendum on Eliot and the *Bhagavad-Gita*," *American Quarterly*, XVI (1964), 102-103. 前者で Rao が使用したテキストは Harcourt, Brace & World の *Collected Poems 1909-1963* であった。ところがそのすぐ直後に Faber から出た版では *Queen Mary's Book for India* や Harcourt, Brace & World の版にあった作品に修正が施されていた。そこで Rao はすぐさまその修正に対する反論を書いた。なお Canary は触れていないが, Amar Nath Dwivedi は他にインド人の視点から書かれた論文として次の二つをあげている。G. Nageswara Rao, "To the Indians Who Died in Africa," *The Aryan Path*, XXXIX, No.2, 125-129. Sushil Kumar Jain, "Indian Elements in the Poetry of T.S. Eliot," *The Aryan Path*, XL, No.2, 71-72. See Amar Nath Dwivedi, *Indian Thought and Tradition in T.S. Eliot's Poetry* (Bara Bazar, Bareilly India: Prakash Book Depot, 1977), p.152. 後者は未見であるが, 前者はやはりエリオットのインド思想にこの作品を強く結びつけていて, "One little-known poem of this famous poet, 'To the Indians Who Died in Africa,' illustrates his full grasp of Indian culture and philosophy." という文が見える。
- 9 Robert H. Canary, *T.S. Eliot: The Poet and His Critics* (Chicago: American Library Association, 1982), p.188.
- 10 Canary, p.188. Harcourt, Brace & World と Faber の版との間の違いは, まず後者で献辞が付け加えられた点と, 第二連の三行目 "warm" の後のカンマが削除され, 最終連の一行目の "Midlands" の後にカンマが挿入されたという点, それに五つの話句に関する変更の三点に分類できる。最後の点について具体的に言うと, 1) 第一連で Play → Playing 2) 第二連の一行目と二行目がそれぞれ he has many *narratives* → he has many *memories*, To repeat at the hour of conversation → Which return at the hour of conversation 3) 最終連で二行目の *memories* → *graveyard*, 五行目の I → We ということになる。Rao は 1) と 2) の修正については, 内面的な関心事が運命という外側へなめらかに移行するのを助けるので賛成しているが, 3) については強く反対している。例えば *memories* → *graveyard* について

は、Midlands については問題ないものの、Punjab の a (Hindu) village の場合には一貫性を欠くことになると言う。ヒンズーの習慣では周知のように苦行僧と幼児以外は埋葬せずに火葬する。だからカンマで挟まれた “And one in the Five Rivers” は追加されているに過ぎないような印象を与えることになる。I→We は特に重要な変更である。『ギター』では “the individual soul” を意味する “ātman” という語が頻出するが、自己の魂を救済するためにはエゴを滅却しなければならないという考えはヒンズーに顕著である。I→we によって “we” のイギリス人と “you” のインド人の間にバランスを持たせたのは分かるが、そのために本来この詩が向けられていた先のインド人たち (“To the Indians...”) にとって、この詩の持つ思想的な暗示力は減少している、というのが Rao の主張である。もっとも 1) から 3) の修正はすべてこの詩を一般化するためのものと考えられるのだが、イギリス人の側のセンチメントが強くなった分だけ、インド人にとっては面白くないというのはよく分かる。この詩がインド人のために書かれたという視点が Rao に代表されるインド人読者の読みの基本になっている点が興味深いので、少し長くなったが紹介しておいた。

11 Dwivedi, p. 155.

12 例えば Jeffrey M. Perl と Andrew P. Tuck の論文, “The Significance of T. S. Eliot’s Philosophical Notebooks,” James Olney ed., *Essays from the Southern Review* (Oxford: Clarendon Press, 1988), pp. 157-177 などの一次資料に基づいた本格的な研究が盛んである。ただインド思想はあくまでもエリオットという巨大な融合装置の中の一部である点を忘れてと詩人の作品の文脈から大きく逸れてしまう危険が常に伴う。インド思想と仏教を区別することもできずに、断片的な批評を行うなどは論外である。

13 Rao, “T. S. Eliot and the *Bhagavad-Gita*,” 577-8.

14 A. J. P. Taylor, *English History 1914-1945* (Oxford: Clarendon Press, 1965).  
A. J. P. テイラー, 都築忠七訳, 『イギリス現代史——1914—1945』(東京: みすず書房, 1987), p. 207.

15 村瀬興雄編, 『フェンズムと第二次大戦』(東京: 中央公論社, 1969), p. 461.

16 この辺りの事情については、坂井秀夫, 『イギリス・インド統治終焉史——1910年～1947年——』(東京: 創文社, 1988) が詳しい。

17 ガンディーと『ギター』については、Cleo McNelly Kearns, *T. S. Eliot and Indic Traditions: A Study in Poetry and Belief* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p. 242.

18 Caroline Behr, *T. S. Eliot: A Chronology of his Life and Works* (London: Macmillan, 1983) p. 57-59 をもとに作成した。



19 "A Note on War Poetry" の一節に "War is not a life : it is a situation" とある。 *Collected Poems 1909-1962*, p. 229

20 Rupert Brooke の有名な愛国詩 "The Soldier" は 次のように始まる。

"If I should die, think only this of me : / That there's some corner of a foreign field / That is for ever England." この詩行と "To the Indians who Died in Africa" の第三連の "Where a man dies bravely / At one with his destiny, that soil is his." の類似性については安田章一郎氏の指摘に負う所が大きい。また戦争詩については櫻井正一郎氏の「死体のゆくえ——ポーア戦争詩から大戦詩へ——」, 京都大学教養部英語教室「英文学評論」53集, 1—67, が大変参考になった。

## Synopsis

“To the Indians who Died in Africa”  
as War Poetry

Tetsuya Taguchi

T.S. Eliot's "To the Indians who Died in Africa" was, as the note to the poem in his *Collected Poems 1909-1962* shows, originally written at the request of Cornelia Sorabji, an Indian lawyer and writer, for *Queen Mary's Book for India*. The poet placed this poem in "Occasional Verses" along with the other two poems which were likewise written during the Second World War. The significance of this poem, therefore, will not be clear unless we try to understand the poet's attitude towards the War as well as the situation he faced at that time.

This poem has not been much discussed and not well understood. A few critics have dared to deal with the poem, but their point was that they found in it the same influence from the *Bagavad-Gita* as could be found in *The Dry Salvages* III. On the other hand, several Indian critics read this poem with enthusiasm and were glad to be able to prove that the poem was written under the influence of the great Hindu poetry. In both cases the critics failed to see the essence of the poem: the poet was here primarily concerned with the War that was still being fought.

Eliot made some changes and revised the text when the poem was

included in his *Collected Poems*. It is certain that he tried to make the poem appealing to the wider range of readers with this revision. But as the title still indicates, the poem was originally dedicated to the Indians who fought together with English soldiers and were killed in North Africa that was foreign to both of them.

In this essay, therefore, I attempted to illustrate what happened in North Africa, how the Indians reacted to their forced involvement in the War, and what the poet was doing in England then. My discussion is focused on this poem, not on *Gita* nor on its influence. My argument is confined to the relation of the poem to the War, not its relation to *The Dry Salvages*. This is all because the direction of the interpretations so far made on this poem ought to be reversed. No matter how interesting it may be to read in it the traces of the influence of *Gita*, it is not the Indian philosophical poetry, but the War which Eliot was involved in, that gives the synthesis to this poem.